

鴻 koh

月刊俳句誌

令和4年12月1日発行

(毎月1日発行)

第17巻第12号 価格100円

12<sub>月号</sub>

2022



啄木鳥の音よ鎌倉の七つ口

はやばやと網ほほづきとなる夕べ

穏やかな浦曲よ雀蛤に

白鷺の来てうつくしき秋となる

寺を出て寺銀杏を踏まぬやう

ひつそりと仏壇町の秋の暮

北斎の墓へ囁くつづれさせ

首切地蔵鳴くはちちろか邯鄲か

小塚原刑場跡の露しぐれ

いてふ散る後顧の憂ひなきごとく

小芋ころころ煮て山里の宵月夜

酒注ぐによき瓢箪のくびれやう

とんぼとんぼやがて一人となる夕べ

# やがて一人と

主宰作品

増成栗人

# 俳 作品抄

## 同人選

図書館のいつもの席へ終戦日  
カサブランカの白が珈琲館の奥  
網ほほづき一つ一つに物語  
行き合ひの空晴れてくる蕎麦の花  
衣被つるりと種田山頭火  
虫時雨大提灯に火を入れて  
踏み石と合はぬ歩巾よ十六夜  
まつさきに暮色のとどく紅葉山  
切株のかすかなぬくみ小鳥来る  
寄り道は羽二重団子獺祭忌  
刺羽舞ふ浦曲の空を知り尽くし

鈴木 崇  
大沼経子  
石垣真理子  
神野未友紀  
五十嵐敏子  
伊藤 隆  
祐森 司  
山崎正子  
伊藤真代  
水沢和世  
水谷はや子

増成栗人 選

## 会員選

母逝く日窓辺に青き夏の蝶  
毬栗のぼとぼと細見綾子の忌  
芭蕉句碑佳き声となる秋の蟬  
月上げよ籠の鈴虫よく鳴けり

井上つぐみ  
藤原明美  
山岸明子  
坂入喜代枝

響き合ふ地球と星と虫の夜  
大花野機影にぐわり呑み込まれ  
堂々と尻の真白き日焼の子  
焙茶に梅干ひとつ残暑かな  
鹿威し山を四方に人住めり

菊池ひろ子  
野村昌代  
中川幸恵  
綾戸五十枝  
渡辺とく系

谷口摩耶 選

文化人集団「エンジンの文化戦略会議」のイベントが、この十月末に岐阜市で開催された。三日間にわたり記念コンサートやシンポジウムが行なわれ、百を越える講座にはたくさんの方が参加して大盛況。大会委員長は岐阜出身の現代美術家で、今年、東京藝大の学長に就任した日比野克彦氏。講師陣には直木賞作家の林真理子氏や歴史学者の磯田道史氏などが顔を揃えた。中で雄一は「腰痛講座」と「俳句講座」(中高生のためのハローワーク)の二つの講座に登壇した。

今回、この『エンジンOn岐阜』を取り上げたのは、それぞれの専門分野を究めた講師陣と俳句について論議を深める機会があったからだ。毎晩、宿泊先のホテル岐阜長良川では懇親会が開かれ、さまざま議論が交わされた。今回は特に「A-」に関する話題が多く、このコラムで先月紹介した「A-茶くん」のことが図らずも講師たちの興味を引いたのだった。本題に入る前に、雄一の担当した講座について触れておこう。まず「腰痛講座」は、腰痛治療の第一人者・福

# ON THE STREET 『ハンブンOn岐阜』



井康之氏がナビゲーターを務める。福井氏は患者のレントゲン写真をふんだんに使って、いろいろなタイプの腰痛やその治療法を解説。雄一は「腰痛や晩稲の空の明るくて 北大路翼」という句を例に引いて福井氏と意見を交わした。福井氏は「労働による腰痛は、仕方がない。しかしこの句は、ようやく晩稲を刈り入れることができる喜びを表わしている」と感想を述べてくれた。ご自身も長時間の手術の後には、不自然な姿勢が続くために腰が痛くなることがあるという。労働と腰痛という分がちがいたい問題を、真っ直ぐに引き受ける福井氏の態度に感銘を受けた。

俳句講座は「俳句で笑おう」がテーマ。良い俳句にはどこか突るポイントがある。ナビゲーターは雄一で、パネリストは翼

講座の前半は雄一と翼氏が例句を挙げてトークを繰り広げる。

- 1 十匹がみんな越冬目高飼っ
- 2 押す糞が消えて糞ころがしつまつく
- 3 毒きのごでしたと町内アナウンス

1の田川飛旅子は楸邨門下。モノを徹底的に観察する姿勢に特徴がある。翼氏によれば、何気なく飼った目高が無事に越冬した様を、科学者の目でそのまま書いているのがクスッと笑えるという。それに対して楸邨の2は、「そのまま書くか」という面白さ。洋子さんの「でも、そこまで書く気持ちはわかる」という率直な意見に賛同する参加者が多かった。3には爆笑が起る。すでにきのこを食べてしまった町内の人に、このアナウンスは「う聞こえたのだぞっ」。

講座の後半は会場の反応が大きかった「きのこ」を席題に、参加者に即興句を作っていた。中でいちばんの笑い呼んだのは「風呂上り冷蔵庫にはしめじのみ」ではなのき句会の後藤美帆さんの作だっ

た。「ハローワーク」は音楽好きの中高生が受講。コンサートの演出をしたい高校生や、K-POPアイドルになりたい中学生が、真剣に音楽業界の話聞いてくれた。

さて本題である。こうした講座が行われた夜、ホテルの屋上テラスには焚き火がいくつか焚かれ、それを囲むように講師たちが集まって自由に議論していた。雄一が座った焚き火では、世界的CGアーティストの河口洋一郎氏と、このコラムで紹介したことのあるメディア・アーティストの落合陽一氏が丁々発止のやり取りをしている。落合氏はなんと手に持ったノートパソコンで、A-を使って河口氏のCG絵画の贋作(?)を次々に作っている。それを河口氏が「僕の作品に似てるね」などと言いながら笑って見ている。「偽物を作るのは止めてくれ」と怒るのが普通なのに、新しく起る現象に対して河口氏は恐ろしく寛容だ。その二人に対して異議を唱える人たちもいる。ある音楽家が「オリジナルの価値はどうなるのか?」と河口氏に問い掛けると、河口氏

氏と、香道志野流二十一家元継承者の峰谷宗苾(そっひつ)氏。宗苾氏とは何度が句会を共にしたことがあり、「風炉名残知らぬ間にある正座だ」という香道家らしい佳句がある。嬉しかったのはこの講座に半谷洋子さんをはじめ、はなのき句会のメンバー四人が駆けつけてくれたことだった。

は「新しい技術の進歩や価値の変容は止められない」と淡々と応えたのだった。このスリリングなやり取りを聞いて、雄一は「A-茶くん」のことを思い出していた。過去の膨大な句をA-に学ばせ、俳句らしいものを生成させるのは、落合氏の行為と似ている。「A-茶くん」の場合は、A-が作った俳句を判定する人間が介在するので、人間らしさがある程度担保される。しかしA-の作成するの絵画はかなり進歩が速く、あるコンピュータでA-絵画が優勝してしまい、問題になったこともあるという。

焚き火から離れた雄一は、別の焚き火にいた建築家やエッセイスト、コピラーイターの方々と「A-茶くん」を題材に夜が更けるまで意見交換をした。それはとても貴重な経験になった。これからも広い視野で俳句の未来を考えて行きたいと思っ。

津田清子

## 山崎正子

芭蕉曾良山の裾まで蕎麦の花  
 鬼胡桃拾ふ背山の晴るる中  
 肩までの芒が原へ踏み込みぬ  
 後生車からからと秋澄みにけり  
 座禅窟にある鉄亞鈴冷やかに  
 空と海つなぐ岬が鷹の里  
 葦刈女葦を砦のごとく干す  
 村挙げて湖整へり雁来るか

丸干しの鰯が浜の夕風に  
 涼新た船のかたちに灯の点る  
 露時雨牧牛の声哀しげに  
 仏間にも木犀の香の届きけり  
 柿簾鳥の餌の欲しいまま  
 待宵の本棚へ本返し置く



石巻市に九月二十日千葉県流山市のアーティス宮崎  
 ケンスケ氏を主に、空飛ぶ大鯨をモチーフ虹を配し、  
 地域の方々が大小の花々を書いた。明るく平和な未来  
 へ向けた横十七メートル、高さ八メートルのすばらし  
 い大壁画である。



「高輪・忠臣蔵の聖地」

鈴木 崇

年末が近づくと講談師は義士伝を読む。

「冬は義士夏はお化けで飯を食い」とマクワで語ることもあるくらいで（お化けは怪談、「春と秋とは食いつばぐれる」と余計な下の句まで付いたりもするわけだが、今回は俳句にまつわる義士伝をご紹介します。

元禄十五年の十二月十三日、ボロの半纏、ボロの股引、煤竹売りに身をやつた大高源吾。追い合い入り乱れるように祀巴と降る雪の両国橋、雪だらけの竹を欄干に立てかけて、はるかかなたを眺めれば、かすかに見えるは隅田の堤、目先に見えるは首尾の松。

討入りを明日に控えた赤穂義士・大高源吾は、俳諧仲間・宝井其角と橋の上でぼつたり再会する。赤穂義士銘々伝「大高源吾」のエピソードである。

長句と短句とを詠み合う付合をしように、其角は  
年の瀬や水の流れも人の身も  
と詠み、源吾は  
あした待たるるその宝船  
と付けた。

年月が過ぎれば人のさだめも変わるもの、水の流れも人間の運命も本当に分らない、という其角の前句に対して、討入りの計画は親兄弟にも他言できない秘密、明日になれば討入りは終わる、長年の願いが叶う、という秘めた心を源吾は付句に託し去つてゆく。其角がその心のうちに気付くのは、討入り決行の日だった――。

十二月十四日、義士討入りの日、主君浅野内匠頭と赤穂義士が眠る港区高輪・泉岳寺は参詣人でにぎわう。が、歳時記で「義士祭」は春の季語なのである。泉岳寺では義士祭は年二回あり、春は四月上旬に義士追善法要やご祈祷などが行われる。

「義士討入りの日」や「古良辰」、その挙を偲ぶ会「義士会」などは冬の季語である。

討入りの日の徳利を置きにけり

岸本尚毅

ここでの「徳利」は、赤穂義士銘々伝「赤垣源蔵 徳利の別れ」のオマージュだろう。



高輪・泉岳寺

赤合羽にまんじゅう笠、右手にごく粗末な土でこさえた貧乏徳利をぶら下げて、源蔵は兄の屋敷を訪ねる。あいにく兄は留守だった。仕方なく兄の羽織を出してもらい、その羽織を前に持参した酒を飲み、別れを告げて帰つてゆく――。

泉岳寺門前の商店にはこの徳利を模したお土産が売られている。人気エピソードなのだ。

「義士伝は別れがテーマ、すれ違う人間の物語」と言われる。  
こんがりと餅焼いて吉良貞辰なり  
荒川心星  
討つも義士討たるも義士石露の花  
小澤 冗  
年の瀬にしみじみ味わいたい。

羽音集

谷口摩耶 選



船橋 菊池ひろ子

習志野 野村昌代

会津 中川幸恵

松戸 綾戸五十枝

露草の瑠璃色の露活けにけり  
白露や白寿の母の銀の髪  
響き合ふ地球と星と虫の夜  
草叢の一つ一つが虫の宿  
一と言が言へず一粒黒葡萄  
震災忌谷中銀座のメンチカツ  
古民家のチェロコンサートけふの月  
大花野機影にぐわり呑み込まれ  
駄菓子屋の老婆の小言菊日和  
送り火の提灯つどふ午後八時  
みんなんを追うてどこまで行つたやら  
夏空や浮きがつつと沈みけり  
堂々と尻の真白き日焼の子  
夕涼みここが私の指定席  
太陽を全身に受けトマト挽ぐ  
新涼や味噌は会津の甘麴  
焙茶に梅干ひとつ残暑かな  
画材屋を出て秋風の根津の街  
師の筆の清しき文字よ秋深む  
ドラキュラの牙の白さよ星流る





吟行で  
同じ  
ところを  
歩いて同じものを  
見ていながら  
切り口というか  
視点が独特な  
句をつくる  
人がいて  
いつも  
感心させ  
られます



目はあるがままのものを  
すべて見ている  
わけではない  
見ようと  
思って見ない  
ものは脳が認識しない  
例えば歴史や調れの  
あるところでは  
先人の評価に従って  
先人が見た  
ものだけを  
見ようと  
しては  
いないか



句にならないと安易に  
見過ごした  
ものにも  
視点や  
切り口を  
工夫すれば  
句になるものがある  
そういうことでは  
ないのかな  
ものを見る  
姿勢ですね  
なるほどー



安易にストライクの  
球だけを振っていないかと  
ボール球も振って  
みたんです